

「さあ、奥様、準備ができましたわ」

亜希子夫人は哀しげな表情でまがまがしい形状をした張り型に視線を落としたがすぐにさっと顔をそむけた。その瞳から涙がこぼれる。

「お口の使い方をお子様方にお見せするのは、おいやですか？おいやでしたらお嬢様にこれを使ってお口を使うお勉強をしていただきますわよ」

芙美は吸盤で床に立てた張り型を足先でつんと突いた。起立している張り型が振り子のように揺れる。

「ああー、あなたはいじわるだわ……」

何ともやるせない憂いの表情を見せた亜希子夫人のぞくりとするような色香に、芙美は痺れる感覚を覚えた。

「奥様、さあ、どうぞお口で……」

芙美が手招く。ウエディングドレス姿で後ろ手縛りの夫人は、よろめくように張り型の前にひざまずいた。すぐそばには子どもたちが椅子に手錠で拘束された状態で座っている。

「見ないで・・・」

視線を合わせることなく、亜希子は由紀と総一に恥辱の姿を見ないで欲しいとかすれた声で懇願する。

「それはいけません。すべてお勉強なのです。奥様、見ていてくださいと言わなければだめですよ。奥様さえ、恥をおかきになれば済むことです。それともお嬢様とご一緒にしますか？」

芙美は全く同じ張り型をもう一つ用意した。二本の張り型が、寄り添うように並んで起立する。二本の張り型を見た亜希子夫人は今にも泣き出しそうな悲痛な面持ちだ。芙美が夫人の耳元でささやきかける。

「・・・由紀さん、総一さん・・・ママの・・・お口の使い方をどうぞ見ていてください・・・」

夫人の美しい顔は羞恥にまみれ、首筋まで桜色に染まっている。後手縛りの亜希子は、張り型に顔を近づけ、とうとう口に含んだ。

「やめてっ！」

由紀が叫ぶ。母がけがされていく姿をこれ以上見ていられない。

「芙美、お母様をこれ以上虐めないで」

しくしくと泣きながら令嬢は母親似の美しい顔をそむける。目の前で純白のウェディングドレス姿の母は、臀部を剥き出しにされた姿で張り型を深くくわえ込んでいるのだ。髪を揺らし、顔を上下させている。男性を形取った物を口でしごいている姿は正視に耐えない。

「ではお嬢様が代わりになさいますか？」

しくしくと泣き出した由美は、弱々しく首を左右に振る。一度は権太のペニスを口に入れられた由美である。サイズは、成人男性のその平均を一回りも上回っている巨根だ。その巨根が由美の口腔内で固くそそり立って突き入れられたのだ。それだけにそのあまりにもおぞましい感覚が残っている。排尿器官である男性器を口に含むなど二度といやだった。思い出すだけで嘔吐感がこみ上げてくるのだ。

「由美さん、いいのよ」

張り型をいったん吐き出し、顔を上げた亜希子は、哀しい目で娘を見るとすぐにその視線をそらし、おぞましい張り型を再び口に含んでいく。

「奥様は殿方のものをお口で愛することがお好きなのですよ。口奉仕をしながら感じているのです。そうですよね、奥様」

芙美はわざとらしく張り型を口に呑み込んでいる夫人の顔をのぞき込む。亜希子夫人は、感じてなどいないとばかりに張り型を口にしたままで、首を弱々しく左右に振る。

「お嬢様やお坊ちゃまの前では、本当のことは言えませんか。ふふふ、では芙美が奥様の身体に直接聞いてみましょう」

芙美は、夫人の後ろに回ると、たくし上がっているウェディングドレスの裾から剥き出しになっている双臀の狭間に無造作に指を差し入れる。張り型を啜えている亜希子夫人の眉間がゆがんだ。

「この通りではありませんか」

芙美の指先は、濡れそぼっている。夫人の分泌させた粘液が付着しているのだ。

「奥様のお体は正直ですわね。はしたないほどに蜜をお流しになっているではありませんか。でも奥様は感じていることをお認めになってくださいませんでしたわね。嘘をおつきになりましたから芙美が罰をお与えしましょう」

もう一つの張り型の吸盤を床から剥がす。そのまがまがしい張り型を夫人の股間に位置を調節して突き立てたのだ。

「これももう一つのお口でお呑みください。これくらいの罰で許してあげますわ、奥様」

「芙美さん、許して…子どもたちの前でこれ以上恥をかかせないで…」

我が子の前でミニ仕立てのウエディングドレスを着て、張り型を口で啜える姿をさらしている。我が子にそのような惨めで卑猥な姿を見せることは身を裂かれるほどに辛いことである。すべては最愛の子どもたちを守るためだという思いが亜希子の心を支えているのだ。しかし芙美はさらに

亜希子に恥辱感を与えようとしている。もう一つの張り型を亜希子の女性自身で呑み込むように仕向けているのだ。

「奥様がいやだとおっしゃるのでしたら、お嬢様がどうなるかもうお分かりでしょ？お嬢様のお口に使うしかありませんわね」

芙美は意地悪くくすくすと笑う。

「お母様！わたしが・・・」

椅子に後ろ手に拘束されている由美は今にも泣き出しそうな表情だ。

「芙美さん、あなたを心底恨みますわ」

亜希子夫人はかかっていた腰を下げていく。芙美が張り型の陰茎を握ってその先端の位置を調整した。亀頭が夫人の薄毛の恥毛に飾られた股間に触れる。亜希子夫人はくびれているウエストゆえに肉感的に丸みを帯びた双臀を下ろし、ゆっくりと張り型を自分のものにしていく。腸管に埋まっている鶏卵の存在が、張り型の挿入を困難にさせる。夫人の中でこすれ合うような感覚を与えてくるのだ。

「おいしそうにお呑みになりますわね」

芙美はおぞましい淫具を呑み込んでいく夫人の双臀をねちねちと撫でまわす。とうとう亜希子夫人はすべてを呑み込んだ。

「ではお口で続きをしてくださいまし」

挿入の具合をのぞき込んで確かめた芙美は、満足げな表情で夫人の双臀をビシッと叩く。

「ううっ」

呻いた夫人は、口を開けてもう一つの張り型を啜えていった。

権太が訪れた。今夜、亜希子夫人は、後ろの処女地を捧げるのである。純白のウェディングドレス姿で玄関まで出迎えた亜希子夫人を権太は抱いた。美しい顔をそむけることなく夫人は権太に口を吸われる。観念した様子で、権太に抱かれたまま剥き出しになった双臀を撫でられる。

「高松家の高貴な奥様は、ノーパンでお迎えかい？」

ミニドレスの夫人は、パンティを穿いていない。権太はもう一度夫人の唇を吸った。

食卓に芙美の作った料理が並ぶ。分厚いステーキ肉を口に放り込み、赤ワインで流し込む権太は上機嫌だ。

「亜希子、スタミナをつけておかないと身が持たないぜ。今夜はオールナイトだからな」

権太の隣に座る亜希子夫人は、ウエディングドレスのまま後ろ手に縛られている。それは芙美のアイデアであった。緊縛されたまま食卓の椅子に座る夫人の美しい顔は憂いの色が濃い。その分、成熟した女性のぞくりとするような色香が漂うのだ。芙美がナイフとフォークを使ってステーキ肉を切り、夫人の口元に運ぶ。

「芙美さん、もういいわ」

「だめですよ。今夜は旦那様に後ろを使ってたっぷりのご奉仕しなければなりませんのに、このように細い食では奥様の身が持ちませんわ。」



芙美がさらにフォークに突き刺したステーキ肉を突きつけると、亜希子は仕方なくといった様子で口を開けた。無理矢理に肉を詰め込まれた夫人の美しい顔に憂いの色がさらに濃く浮かぶ。

「奥様、ワインを飲んで酔ってしまわれた方がいいですよ。」

亜希子夫人の前には、大型の硬質ガラス製の浣腸器がごろりと置かれている。鈍い光を放つ浣腸器のノズルが、亜希子夫人のワイングラスに差し込まれる。芙美は、赤ワインを吸い上げると、そのノズルを夫人の口元に突きつけた。食卓の向かい側に座っている由紀と総一はうつむいたまま黙って食事をしている。美しい母がねちねちと嬲られるその光景は正視に耐えない。生活のためにわが身を生贄におとしめた母が哀れだった。金の力で母の体を弄ぶ権太が憎い。権太以上に芙美が憎かった。長年にわたり高松家に使えてきた家政婦の芙美は嬉々として母を虐めているのだ。家政婦の分際で、母をこれでもかといふことん辱めるのだ。

母の口に恐ろしく大きな浣腸器が突きつけられている。母の白い喉が上下している。芙美がピストンを押して、無理矢理に赤ワインを飲ませていた。

「奥様、今夜の調教メニューをお知らせしますわね」

芙美は、空になった浣腸器を夫人の目の前にことりと置いた。

「まずは、この浣腸器を何度も使って、奥様の後ろを綺麗にしますのよ。奥様のお出しになる物が、濁りのない薬液だけになるまで繰り返し浣腸することになりますから覚悟くださいまし。」

芙美は、子どもたちにも聞こえる声で、今夜の調教の内容を聞かせる。亜希子夫人は聞くに堪えない芙美の話に耳をふさぎたくなるが、それはかなわない。きっちりと後ろ手に縛られているのだ。おぞましい内容に身が震える。繰り返して行われる浣腸後に、張り型を使用した拡張調教をすと言う芙美の目は笑っている。そして犬のように這ったままアナルセックスで奉仕させられる。目を閉じた亜希子

夫人の表情がこわばる。

「もっと嬉しそうなお顔をしてくださいまし。今夜、奥様は後ろの処女地を旦那様に捧げられるのです。喜ばしい日ではありませんか。」

「亜希子、アヌスの具合はどうだ？ 芙美の調教で、アヌスは柔らかく開花しているだろうな？」

ワイングラスを飲み干した権太が目を細める。

「旦那様がお聞きですわよ。お答えください、奥様」

後ろに立っている芙美が夫人の髪をつかみ、顔を権太に向けさせる。亜希子夫人は強制的に向けさせられた美しい顔をなよなよと左右に振る。今にも泣き出しそうになっている。